
生まれ変わりは神様

るい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生まれ変わりは神様

【Nコード】

N86340

【作者名】

るい

【あらすじ】

よりよき世界にするために、日々努力していた少年、伊丹蓮児はとある事故で亡くなってしまふ。目覚めた彼を待っていたのは、詐欺師の神様と、人使いの荒いDS部下だった。

何の力も無い少年が四苦八苦しながら成長していく、といいな。

一話 ニコニコ信用金庫出張所

机上に寄せられた一枚の書類。

俺は驚いてその内容を吟味する。うる覚えではあったけど確かに自分が書いたものに違いない。

『伊丹蓮児』

俺の名前だ。その隣には母印がある。あの時のはこれだったのかと、おもわず溜息を吐きそうになってしまう。

「何でこうなつたんだろうな？」

「そりゃ、ご利用は計画的につて事だろ」

半ば強引に押しかけてきた二人組みの男の痩せた方が皮肉っぽく言ってくる。スーツでサングラスなその姿はどう見ても、やくざにしか見えない。

「まさかこつちにきてからも借金なんて言葉に会えるとは思わなかった」

「また一つ勉強になつたじゃないか」

笑いながら肩を叩いてきたのは、一見優しそうな雰囲気、貫禄のあるおっさんだ。昔だったら「お前らに学ぶことなんてあるわけないだろ」ぐらいの毒舌は言つたかもしれないがさすがに、現状はおとなしくしていた方がいいだろうか。

「伊丹蓮児^{いたみれんじ}。これからお前には選択肢をやろう。何、俺だって鬼じゃない」

言葉とは裏腹に選べる候補は少なそうな気がした。

「鬼じゃなくて、生まれ変わりを希望している一般市民でしょ」

驚いた顔を表に出さず、冷静さを貫いているのは素直に賞賛したくなった。鋭い刃物のように冷徹な思考を持つ合理主義者。さすがはやくざなのかな？

「生まれ変わりを希望するのは当然だろう。誰だってな。それで選択肢だが、一つ目はお前さんの権限とやらで俺たちを転生させるこ

と。二つ目は当たり前のことだが書類の内容どおり返してくれればいい」

グラサンが話している間に、俺はバンクシステムにアクセスしていた。知識の集積地である、バンクにはあらゆる情報が入ってくる。二人はここに着てからすぐ転生希望を役所に提出し、さらに転生期間の短縮をするために様々な仕事に手を出しているようだ。まだ不慣れなこともあつて分かったことは微々たる物だ。

「つまり借りた金は耳を揃えて返しましようってことだ」

僕が借りている借金は膨大らしい。

不意に今まで静観していたおっさんが雰囲気を変えて切り出した。「バンクから何か分かったか？」

指摘されるとはまったく思っていなかった。そもそも俺はここに着てからの日数が浅い。何もかもが分からない状態なのだ。

「残念ながら金持ちになる方法は載ってないらしい」

二人が同時に笑った。ただし片方は警戒しながらだったけど。本当にいい役者である。

「もし金を返すなら、長期間にわたって地道に返すのもあるが、どうだ、もつと手早く返す方法もあるんだが訊きたいか？」

嫌な予感しかない。そもそも俺がした借金ではないのだから、返すのは俺ではないだろう。だがあの俺のサインが入った書類を取り返さない限り難しいだろう。

俺の沈黙を肯定と受け取ったらしいグラサンは上機嫌に続ける。

「お前さんは若いからな死ぬ気で労働してくれば、あつという間だ」

笑って言うことじゃないよな。一体何をさせられるのか、ありえそうで怖い。

二人はしばらく居続けるかと思っていたが、とりあえず今日は顔見せだったらしく帰るそうだ。俺がこのまま雲隠れするのはどうだろう、と思っていた矢先におっさんが釘を刺してきた。

「言わなくも大丈夫だとは思うが、借金取りつてのは広大なネット

ワークがある。どこに行っても手に取るように分かる」

すこしばかり脅かすような口調。グラサンもそれに乗っかる。

「前に一度逃げた奴がいたが、あっけなく捕まえちゃったよ。あまりにも張り合いが無くて驚いちゃった」

どこまで本当なのか調べた方がよさそうだな。

入り口付近まで移動したおっさんは最後に付け加えた。

「俺らのところは金利が他に比べ圧倒的に良心的だ。時間がかかっても返してさえくれれば俺らはいつまでも待つぞ。では今後もご贖に」

扉を開け立ち去ろうとした二人は目の前に現れた少女に蹴られて倒れてしまった。

……え？

余りの事態に正直ついていけない。誰だ？ 新たな借金取りだったら絶望するかもしれない。

少女は伏している二人に目もくれず、こちらに歩いてくる。室内の温度が二、三度下がったような気がする。

「お前が新たに管理局の担当だな」

「そうだが、お前は誰だ？」

なんとか目を合わせて答えることができたと思う。

どこことなく高慢で威圧的に思える少女は、立ち振る舞い、歩き方が俺から見ても明らかかなほど綺麗だった。だが何よりも視線が外せないほど心惹かれるのはその鋭いまでの力強い瞳だ。吸い込まれると錯覚するほど透き通った瞳は、何人たりとも穢すことのできない真っ直ぐなものだった。

「バンクで調べろ、と言いたいが今回は許す。私の名は駿河。お前の部下だ」

部下なのにとんでもなく高飛車な少女だった。

「いきなり人に蹴り入れという無視するとはいい度胸じゃねーか」
復活した二人が立ち上がり、駿河に声を掛ける。グラサンが外れた姿は思いのほか若かった。

「おい、伊丹蓮児。こいつらは誰だ？」

知らないのに蹴ったようだ。通るのが邪魔だったとかそんな理由で蹴ったのかもしれない。もはや蹴ったことさえ憶えていないかもしれない。

「ここの前の神様がしていた借金取りの方々。縁あって僕が返すことになった」

「そうか。では貴様らに告ぐ。貴様らに返す金などびた一文存在しない。塵芥になりたくなければさっさと帰るがいい」

暴言にもほどがある。俺も性格は良くないと自負しているがこいつには負ける。

さすがにこれほど言われては二人も黙っていないと思っていたが、やはり侮れない方のおっさんは何も言わずに帰っていった。その後ろをグラサンが慌ててついていく。

きつとまた来るとは思うが、俺としては平和的解決を望みたい。

「いい気味だったな」

前言撤回。戦争が起きる。

これが、とんでもなく美人のくせに性格が極悪な少女、駿河との出会いだった。

一話 ニコニコ信用金庫出張所（後書き）

若干反チートものを意識していたりいなかったり。

まだぼかしてますので分かりにくい箇所があるかと思いますが、ご了承ください。

私のほかの作品を見れば分かりますが、ふざけているか、真面目かの二択ばかり。

今回は割りと真面目の部類ですよ。ええ。

現世 蠢く虚像（前書き）

完全無欠にフィクションです。

現世 蠢く虚像

『俺の国が天国だって言うなら、ここはさしずめ地獄ってことか』

安全な場所なんてなかった。そこかしこに瓦礫が崩れ落ち、鎮火の間に合わない火の手は逃げ場を無くすように燃え広がるばかりだ。これは日常なのか、偶発的な事故なのか。徹底的に調べ上げたはずの情報は既にゴミと化して、役に立たない。視野には逃げ惑う民間人と赤い光景。火であり、そして血である。軍が動き出しているのか、遠くからヘリの轟音が耳を押しつぶしてくる。両手でそれぞれの耳を押さえても、さして効果があるようには思えなかった。それどころか叫び声や泣き声が隙間を縫って、脳を刺激してくる。

内乱なのか騒擾なのか。身を潜めていた俺には状況が分からない。だがどうみても戦闘状態だとガキでも分かる爪痕が残っている。原因はおそらく宗教が政治の二択。

まずは蓮児と合流するのが最優先だろう。俺は隠れていた民家の物陰から立ち上がった。すぐ傍に人間だった物が落ちてあるが、眉をひそめることもなくなった。死に鈍感になったのか。感情が欠落し始めたのか。

フラフラと当ても無く歩き出すが、どこ行けばいいかも分からない。携帯電話はどこかで落としたのらしく、彼との連絡手段は他に無い。舗装されていない道路はあちこちに亀裂が入っており、真っ直ぐ歩くことさえ難しい。しばらく炎天下の道を進み続けると、古くはあったが立派に機能している病院が建っていた。

そこで俺は彼女に出会う。

出会った？

周りの風景が滲み、逆に彼女のはかない存在がはつきりと浮かび上がった。周りに何も無く、俺と彼女以外の全てが消えた。

何も見えない。何も聞こえない。

蓮児はどこにいる？

みえなくても彼が近くにいと確証があつた。だが相変わらず何も見えない。視点は彼女に固定され、動くことができなかった。

彼女の唇が動く。ぼそりとした呟きだが、不思議と距離がある中、耳まで届いた。

彼女は繰り返し言った。

『どうして』

待ってもそのコトバしか伝わってこない。

気が付けば、彼女は血まみれだった。苦しそうで辛そうな表情を浮かべている。

目が合った。何かを訴えているが俺には分からない。蓮児がいればきつと分かるだろう。だがその蓮児の姿はない。

彼女の元へ動こうとした。だというのに足は地面と一体化したように一歩も前に進めない。その場で重く停滞し続ける。彼女の声が段々と小さくなっていく。

俺は必死に脚を動かそうとして、力を振り絞った。

『さっさと動きやがれー！』

『……どうして』

/

「はあー、はー」

ベッドで上半身を起こし、呼吸をゆっくりと調えていく。

「夢か」

まだ日も昇らない時間帯。寒さの余り、枕元に置いたりモコンで暖房を入れる。

布団に包まりながら、先ほどの悪夢を思い出す。

悪化しているが、それは夢でもなんでもなく現実だった。たしか

に俺とアイツは三ヶ月前に地獄を見た。

少女にも出会った。内乱に巻き込まれた彼女は、現地の資材では手の施しようが無く、亡くなってしまった。直接見たわけではないが、助かる可能性はほぼゼロだろう。

あの地獄は鮮明に脳裏に浮かぶ。美化されること無く、ただ事実をありのまま認識できる。きっと一生忘れられないだろう。それくらい失った物が大きかった。

少女。そしてアイツ。伊丹蓮児とは、あの紛争以来会っていない。会いたくても会えない。最近までは行方不明扱いだったと思うが、もうマスコミに名前が上がる事さえほとんどない。つまりそういうことなんだろう。

世間の誰もが注目して、そして誰の記憶からも忘れられていく。それは、きっと蓮児も文句は言うまい。変な奴だったからな。

だが、変な奴でも唯一の心許せる仲間だった。奇妙な関係だった。がそれでも、光り輝いていた気がする。蓮児がいなくなった今。俺は一人ぼっちなのか。

蓮児と出会う前に戻っただけだと言うのに、途方も無いまでのぼつかりと心に穴が開いたような空虚さを感じてしまう。途轍もなく濃縮された時間から開放され、俺に残されたのは、俺自身と、二人のアジトと、アイツとの思い出だけだった。

「どうして、消えたんだ？」

現世 蠢く虚像（後書き）

読了ありがとうございます。まだまだ続きます。最後まで見通しが出来ている数少ない（オイッ！）作品ですので、もしかしたらいるかも分からない読者のために、今後も頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8634o/>

生まれ変わりは神様

2011年3月15日08時55分発行